

いのちを支えて

県内緩和ケアの現場から

8

「1つになる瞬間まで、家族は精いっぱい看病してきた。ホスピスという温かい場所があったおかげです」

新潟市西区の佐藤政代さん(五七)は二年前、夫の保さんを白根大通病院ホスピス(同市南区)で見送った。保さんは再発した喉頭がんが食道に転移、六十歳で亡くなるまで最後の二カ月余りを、完成直後の病棟で過ごした。

同病院は緩和ケアという医療分野に足を踏み入れたばかり、看護スタッフの技術には差があった。例えば痰の吸引、数分おきにチューブを気管に入れると、のと元がんが張り出した保さんは痛さで悲鳴を上げた。手慣

すみか
居場所 求めて

遺族の願い

心の「よづい」に

看護師を評価満足度高く

れた政代さんと息子夫婦が、泊まり込んで看病しなければならなかった。子夫婦との絆が強ま

笑ましかった。家族全員がみとりに立ち会い、看病を分担した息子夫婦との絆が強ま

「個人差が大きい」といふ声をよく聞く」と指摘する。患者に最も近い看護師の存在が、病棟への評価に影響していると推測す

「一ラ(同市)に足しげく通う。みえ子さんにとってビハールは、開所当初(一九九二年)からイ

嗣さんは週一回、病棟でボランティアをす

緩和ケアは体と心の苦痛を取り除く。病棟に限らず、自宅でもケアを受けることができ、誰もが受けたいとき、誰もが受けられるケアにしたい。そんな医療に近づけようと、医師と看護師、家族の奮闘が続いている。

しかし、政代さんにはホスピスへの悪印象がない。

メモを取りつつ挿管された。ホスピスには心

和ケア病棟で身内をみると約五千人を調査した。

その結果、遺族の85%以上は「スタッフ

さんが七年前に五十九歳で亡くなった長岡西

遺志を継ぐ形で、武

「シリーズ「すみか」の連載は今回で終了します」

同病院は緩和ケアという医療分野に足を踏み入れたばかり、看護スタッフの技術には差があった。例えば痰の吸引、数分おきにチューブを気管に入れると、のと元がんが張り出した保さんは痛さで悲鳴を上げた。手慣

荷物を抱えて去っていく家族、いつの間にか空っぽになった病室。ホスピス、緩和ケア病棟では、隠しようがないほど死が日常だった。患者の大半は高齢者だ。若い世代は限界まで延命治療に臨むため、ほとんど来ない。治療と緩和ケアが分断されている現状が映し出

「家族に初めて訪れる死が自分だったから、どうでしょう?」

スタッフが言葉に、青年が味わった恐怖や絶望感がよみがえってくる気がした。

緩和ケアはまだ多くの人にとって、死が目前に迫ったタイミングでしか縁がない。人材や病棟不足、費用の課題も大きい。しかし、痛みや不安を感じたとき、我慢しないで済む環境を整えば、人生をもう少し前向きに考えられるはずだ。

誰もがいずれ、たどり着く先は死だ。限りある時間を自分なりに生き抜くためにも、普段から恐れずに死を語り合うことも大事だと痛感した。



亡き夫の写真や絵を仏間に飾る佐藤政代さん。「夫婦でどこでも行きましたね」と懐かしそうにアルバムをめくる新潟市西区

取材を終えて
身内の古い衰える姿や亡きがらを、若い世代が目にする機会はほとんどない。まして健康なときは、若い人から順送り死ぬものだと根拠もなく信じて

環境整備必要
安らぎ与える
「すみか」の連載は今回で終了します

「すみか」の連載は今回で終了します

「すみか」の連載は今回で終了します

「意見、ご感想を募集しています。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、〒950-1189 新潟日報学芸部「すみか」取材班まで。ファックスは025(378)9539、メールはmagazine@nibpo.co.jpへ。紙面などで紹介する場合があります。

(笹川比呂子)